

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	酒井 仁美
2. 審査委員	主 査：（兵庫教育大学准教授） 藤原和政 副主査：（鳴門教育大学教授） 葛西真記子 委 員：（兵庫教育大学教授） 市井雅哉 委 員：（兵庫教育大学教授） 海野千畝子 委 員：（兵庫教育大学教授） 伊藤大輔
3. 論文題目	青年期の社会的認知及び対象関係とTAT反応との関連に関する研究
4. 審査結果の要旨	学校教育実践学専攻学校教育臨床連合講座 酒井仁美 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和6年7月8日(月) 18時00分～19時15分 場 所：オンライン 1.学位論文の構成と概要 (1) 構成 第1章 TATの解釈に関する研究動向 第2章 大学生のTATを用いた社会的認知と対象関係尺度（SCORS-G）の因子的妥当性の検討 第3章 大学生のTATを用いた社会的認知と対象関係尺度（SCORS-G）の下位尺度間の関連—構造方程式モデリングによる検討— 第4章 大学生のTATを用いた社会的認知と対象関係尺度（SCORS-G）の解釈妥当性の検討 第5章 総合考察 (2) 概要 本研究の目的は、主題統覚検査（以下、TAT）によるアセスメントに際し、スコアリングシステムとして社会的認知と対象関係尺度（以下、SCORS-G）を用いた場合の解釈妥当性を確認することであった。 第1章では、TATの解釈や分析方法の歴史について量的研究を中心に紹介し、SCORS-Gの概要やTAT物語を用いた先行研究を整理した。SCORS-GはTATのスコアリングシステムとして注目される一方、課題も指摘され、非臨床群に焦点を当てた研究や文化差の影響についての必要性が述べられた。そこで第1章では、SCORS-Gの交差妥当性と解釈妥当性を確認することで、TATの解釈を根拠に基づかせ活用範囲を広げること、非臨床群のデータを用いたSCORS-Gの実証的研究を通じて、尺度としてのSCORS-Gの信頼性と妥当性の担保に貢献できる可能性があることを論じた。 第2章では、研究1として、日本の大学生のTAT物語を使用してSCORS-Gの因子的妥当性について文化差やジェンダー差を考慮して検討した。分析の結果、SCORS-Gは3因子構造であることが確認され、Siefert et al. (2018) との多母集団同時分析の結果から、日本の大学生のTAT物語を解釈する際には、男女間の社会的因果性に関する語りの詳細さを考慮する必要があることが考察された。

第3章では、研究2として、TAT物語を用いて全8尺度を組み込んだSCORS-Gの因子モデルをジェンダー、各下位尺度の関連を考慮した上で構造方程式モデリングによる検討を行った。研究1では単純構造を優先し対人関係への感情投入尺度がモデルから外れたが、研究2ではこの尺度を説明変数とし、他の7尺度を目的変数としてモデルに組み込んだところ、モデルが安定した。この結果から、対人関係への感情投入尺度が因子構造全体に与える影響について考察された。

第4章では、研究3として、SCORS-GによるTATの解釈妥当性を、多角的な精神的健康に関する自己報告（以下、ASR）との関連によって検討した。まず、ASRの下位尺度得点とSCORS-Gの下位尺度得点の相関分析の結果、思考の問題尺度と自尊感情尺度との間に負の相関が認められた。次に、ASRの下位尺度得点のパターンに基づいて、潜在クラス分析により参加者を2群に分類した。SCORS-Gの下位尺度得点平均の群間差を分析した結果、ASR高得点群はASR低得点群よりも、自尊感情尺度得点平均が有意に低かった。最後に、SCORS-Gの下位尺度得点のパターンに基づいて、潜在クラス分析により参加者を3群に分類した。ASRの下位尺度得点平均の群間差を分析した結果、いずれの尺度にも有意差はみられなかった。追加分析として、ASR低得点群、ASR高得点群それぞれについて、SCORS-Gの各下位尺度得点と、ASRの各下位尺度得点間の相関分析を行った結果、ASR低得点群、ASR高得点群では各変数との相関関係に差異あることが明らかになった。これらの結果から、青年期の自尊感情と思考の問題との関連について考察された。

第5章では、日本の大学生を対象としてSCORS-Gの信頼性と構成概念の妥当性、TAT解釈の有用性について検討された。SCORS-Gの構成概念の妥当性は確認されたが、ジェンダーや文化差が影響することが示唆された。信頼性については、文化の違いが評定基準の理解を難しくする可能性が指摘された。また、自覚的な精神的健康度が低下している人の対象関係を評価する際にSCORS-Gの解釈が有用であることが示唆され、日本の司法・矯正領域での活用の有益性が論じられた。

2. 審査経過

(1) 審査概要

酒井氏の論文概要についての口頭発表が行われた後、各審査委員からの質疑、それらへの酒井氏の応答を経て、審査委員会による審査が行われた。

(2) 学位論文の独創性と発展性について

TATは主要な投射法検査であり、個人の反応からパーソナリティを把握することが可能であり、対人関係や対人認知の特徴を理解するのに寄与する。一方で、実施法の複雑さや解釈の主観性、信頼性の欠如が課題とされていた。このような状況において、SCORS-Gを日本人青年のデータに適用し、TATの解釈妥当性を統計的に確認した本論文の試みは、極めて高い独創性をもつばかりではなく、本邦におけるTATの発展、具体的にはテスト・バッテリーにTATが組み込まれる機会が促進されることが期待できる。

(3) 学校教育の実践への貢献あるいは社会的貢献

本研究の成果は、日本におけるTATの信頼性・妥当性研究を促すとともに、テストの臨床教育のスタンダードを確立することに寄与する。従来のTAT解釈のためのテキストは個人の物語の質的分析に力点を置いていたため、解釈者には臨床経験の深さが要求された。しかし、本論文により日本人データのSCORS-Gによるスコアリング基準の明確化がなされることによって、訓練システムが構築され、テストの育成が効率的に行われ、かつ、一定レベルの解釈が初心者でも可能となる。これは臨床現場、とくに臨床家の人口が少ない司法矯正領域への大きな貢献になりうると考えられる。

3. 審査結果

以上より、本審査委員会は酒井仁美の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。